

35 コモ (イタリア)

都市と隙間と「透明性」



●古代ローマの骨格

コモはアルプス南麓の湖に面した街である。ミラノ・マルペンサ空港からミラノとは反対の方向に向かうと、しだいに地形が山がちになる。山の険しさが間近になってくると、その谷間にコモ湖が現れ、南岸にコモの街がある。

コモはすでに古代ローマの共和制時代から植民都市となっていた。そのころの南北に長い街の骨格は現在でも明確に残っている。北端をコモ湖に面する港とし¹⁾、そこから南に向けてまっすぐに道路が走る。南の端は中世に築かれた市壁までで、ここには高さ40mの塔のある門が開いている。まっすぐの道は古代以来の中心道路で、その途中にはドゥオーモやサンフェデーレ聖堂があるが、サンフェデーレ聖堂前の広場はローマ時代のフォルム（公共広場）であったという。

●マエストリ・コマチーニ

ドゥオーモやサンフェデーレ聖堂は中世に起源をもつ建築である。中世はコモでは特別な意味をもっている。それはマエストリ・コマチーニ（コモの親方たち）²⁾と呼ばれ、北イタリア、フランスなどにロマネスクの建築を築くことになる職人集団を輩出した時代である。彼らは石工や左官の集団であり、建築術を一種の秘伝として各地を渡り歩いた。彼らの移動にしたがって建築がつくられ、ロマネスクの時代が開かれていったのである。



図1 コモの街 湖前の広場からまっすぐの中心道路を見る。中央に見える尖頭がドゥオーモ

彼らは職能としての建築家が登場する前の時代の職人である。古典主義のような寸分違わぬ様式をもつわけではなく、その土地ごと、材料ごとに建築を建てていった。しかし一方で技術的、構法的に一定の形式があることも事実である。つまり、一定のタイプをもちながら、場所が変わるごとにヴァリエーションが生み出される。これこそがロマネスクの特徴であり、それを見る楽しみでもあるのだ。

コモでは、市壁外のサンタッポンディオ聖堂で、マエストリ・コマチーニの仕事の頂点を見ることが出来る。11世紀の建物で、丁寧なしかし素朴な石積みの空間は、千年前のかげがえのない手の痕跡を伝えている。

●カーサ・デル・ファッショ

ドゥオーモはマエストリ・コマチーニの時代につくられはじめ、クーボラを載せることによってそれを完成させたのは18世紀のフィリッポ・ユヴァッラであった。ユヴァッラはトリノでの仕事が知られる後期バロックの建築家である。

そのドゥオーモの横に廻ると、白く細く四角いフレームが、石ばかりの街の中でひときわ新鮮に目に飛び込んでくる。カーサ・デル・テッラーニと呼ばれる財務警察の建物で、1936年にジュゼッペ・テッラーニの設計によって建てられたかつてのカーサ・デル・ファッショである³⁾。



図2 サンタッポンディオ聖堂 ロマネスクの後陣（アプス）と双塔

*1 かつては湖岸が現在よりも奥に入っており、今の湖岸前の広場は19世紀に埋め立てられたものである。(文献⑤)

*2 maestri comacini

*3 テッラーニはコモに生まれ、コモで活動した。湖岸のホテル・メトロポール・スイスの改修にはじまり、集合住宅ノヴォコムン、サンテリア幼稚園、集合住宅カーサ・ジュリアーニ-フリジェーリオなどその名作のすべてがコモにある。

*4 隙間は都市空間を考えるキーワードである。隙間がもたらす「透明性」によって豊かで親密な空間をつくることができる。例えば古い路地や代官山ヒルサイドテラスが好例であろう。一方、隙間を詰めて壁をなくしていくと、経済的には効率のよい建物ができる。しかし、そのヴォリュームは周囲から突出してしまう。複合ホールや郊外のショッピングセンターなどがその例である。

カーサ・デル・ファッショは近代建築の到達点を示す名作である。しかし同時にファシスト党地区本部というその政治的背景から、評価には常に両義性がつきまとう。そのことはさらにまた近代という時代の両義性とも関係し、テッラーニとその建築の評価を複雑にする。だが、コモの街の一角を占めるひとつの建築物としてのカーサ・デル・ファッショの評価は、その都市的文脈への誠実な回答と、高度に洗練されたモダニズムの表現において揺らぐことはない。

●「透明性」

ドゥオーモの南側は、その側面の延長線上に視線が通過する。その視線を受け止めているのがカーサ・デル・ファッショである。ドゥオーモの間には、広場、古典主義のロτζィア、私鉄の線路、街の東側の外周道路などさまざまな都市的構成があるが、それらの向こう側に白い格子が見える。近づいて見ると、この建物は隣の街区の面までセットバックして前面に広場をつくり、建物の正面性を高めている。この正面は幅に対して高さは正確に1/2、正面は7等分され左の5柱間を柱梁の格子としている。1階床は地面から梁高分だけ上がっており、そのために格子の独立性が増している。

そして、正面性に決定的な効果を発揮しているのが、前面の格子と後ろのカーテンウォールとの間にあるバルコニー分の隙間である。壁と格子が



図3 ドゥオーモ南側から見るカーサ・デル・ファッショの正面

●参考文献

①コーリン・ロウ、伊東豊雄、松永安光訳『マネエリスムと近代建築』彰国社,1981

②矢萩喜徳郎、赤堀忍ほか『FH represent 1/Giuseppe Terragni』アー・ドゥ・エス・パブリッシング,1998

③鶴沢隆ほか『ジュゼッペ・テラーニ』I N A X出版,1998

④ブルーノ・ゼーヴィ『ジュゼッペ・テッラーニ』鹿島出版会,1983

⑤『イタリア旅行協会公式ガイド1 ミラノ/イタリア北西部』NTT出版,1995

分離することで、ふたつの面の間に空間の奥行が生まれ、いわば空間の層ができるのである。前面の格子は部分的に透けているために、奥のカーテンウォールのパターンが見え隠れし、観察者の移動に従って見え方が変化する。この「透ける」ということはガラスの透明性とは別の感覚で、建築史家コーリン・ロウはこれを「フェノメラルな透明性」と名づけた。この「透明性」によってある面の奥に次の面が隠れていることを知覚できることが、遠近法を可能にしているのであり、遠近法を透視図法というのはこの意味にほかならない。さらに、中央の3柱間の最上階はヴォイドであり、柱梁は宙を飛んでいる。その背後に山が透けて見え、さらに奥の空間の存在を知覚できる。

このような、奥の、さらに奥の空間が知覚可能な「透明性」の獲得こそ、近代建築の果実ではなかったか。こうした表現は構造と面、柱と壁が分離しなければ不可能であり、ル・コルビュジエが唱えた近代建築のあり方に基づく。都市空間において、構造と面が分離することで生じた隙間をコントロールすれば、「透明性」の効果によってつぎつぎとその先の空間へとつながりをもつことができるはずである。しかし、現実の世界が進んだ方向はそれとは逆の、隙間を詰めて巨大化した、きわめてエッジの強い、周囲とのつながりを絶った建物が横行している*4。近代建築がもたらした軽やかな可能性を失ってはならない。



図4 カーサ・デル・ファッショ 格子とカーテンウォールの間にバルコニー分の隙間がある。格子のスクリーン効果が増している